

戯曲

デイトオニユソス

—世界の墓—

正道

SEIDOU

III

目次

ディオニュソス 世界の墓 III

全体の目次 3

第8章 存在と虚無

登場人物 5

アポロンとディオニュソスの対面 5

シンフォニーの序奏 10

第9章 大神アテナ

登場人物 19

新しい媒介の登場 19

男性神アテナの御業 23

第10章 暁の子

登場人物 30

エロスの力 30

暁の子の誕生 32

第11章 オンパロス

登場人物 37

ゼウスの逆襲 37

封印の投網 42

世界の墓 47

エピソード

吉村作治監修『古代エーゲ・ギリシアの謎』より	51
楠見千鶴子『酒の神ディオニュソス』より	51

ディオニユソス

世界の墓

III

全体の目次

前巻までのあらすじ

第1章 トラキアのオルフェウス

第2章 太陽と月の詩

第3章 見捨てられた女たち

第4章 オルフェウスの死

第5章 首とディオニュソス

第6章 豎琴とアポロン

第7章 ピュトンとピュティア

第8章 存在と虚無

第9章 大神アテナ

第10章 暁の子

第11章 オンパロス

エピローグ

第8章 存在と虚無

登場人物

チェリア ピュティア（デルフィの巫女）の一人。ピュトンの腹中を通り、ディオニュソス一行を、デルフィまで案内してきた。

アポロン 太陽神。真昼の白日によって象徴される、遍満する光としての「存在の神」。

ヘルメス・トリスメギストス 神々の歴史を操る至高の神。その操作の目的は、神々のマンダラを織りなすことにある。トリスメギストスと表記。

ディオニュソス 夜の暗闇によって象徴される「虚無の神」。オルフェウスの首を抱えている。

オルフェウス 生首の状態で歌を歌う。ディオニュソスに抱えられている。

ピュティアたち チェリア、セフィーネ、ペレイネーの三人。

マイナスたち モルティ、フィカー、ニグ、レドの四人。

シレノス デイオニュソスの従者。

アポロンとディオニュソスの対面

パルナッソス山の火口を挟んで、アポロン一行とディオニュソス一行とが対峙している形。アポロンの側には、ヘルメス・トリスメギストスが加わっている。

チェリア（ディオニュソスの側を離れながら）ヘルメスさま、ディオニュソスさまをお連れしました。アポロンさま、ただいま帰りました。

〔チェリアが、完全にアポロンの陣営に戻る〕

アポロン おお、ピュティア・チェリアよ、何といたことをしてくれたのだ。ここはデルフィなのだぞ。私の聖域なのだぞ。なのに今、ここに奴がいるのだ。

チェリア（困惑して） ああ……

アポロン 私の領地に、あの異形の者が足を踏み入れた、と考えただけで吐き気がする。一体どういう訳で、この私が、あのような者と対面しなければならぬのだ！

トリスメギストス その理由については、すでに私が話したはずだ。そう、もっとも離れた二つの原理が一つに合わされば、そこに最終的な一つの原理が現れる。その原理を現出させるために、私は、お前とディオニュソスを引き合わせたのだ。

〔ヘルメス・トリスメギストスが中空を見上げる〕

トリスメギストス この書を読んでいる人間たちよ、これから現れる神のマンダラを、しっかりと胸に刻みつけよ。それは幾転生しようとも不動な、お前たちの心の骨格となるだろう。

アポロン（周りを見ずに怯えて） ああ、終わりだ。私は今日という日に破壊される。私が積み上げてきた「存在」が、今や、虚無の神によって破壊されようとしているのだ。もうすぐ私が成した形象は微塵に壊され、私という造形の神は「徒勞」の代名詞となるだろう。おお、そんなことに耐えられるだろうか。恐ろしい、本当に恐ろしい。

チェリア いえ、違いますアポロンさま。あなたはディオニュソス神によって、全てを失う訳ではありません。だってあなた様は、すでにその懐のうちに、蛇を飼っておられるのですから。地下の叡智の象徴たる蛇を。

アポロン そなたは、あのピュトンのことを言っているのか？

チェリア そうです。ピュトン本人が言っていました。自分はディオニュソスと同じものを象徴しているのだと。

〔ディオニュソスが、火口の縁を歩きながら、アポロンに近づいていく〕

ディオニュソス 兄よ。存在と虚無が出会えば、たしかに「存在から虚無への移行」たる破壊の相が生

じもしましょう。あなたが今、心から怖れているものです。

アポロン それ以上こちらに近づくな！

ディオニュソス（それでも近づきつつ）しかし兄よ、私は過去に、存在と虚無とが織りなす、破壊以外の相を見たことがあるのです。

アポロン 私には、お前が何を言っているのか解らない！

ディオニュソス（トリスメギストスに一礼してから）恐れる必要はないのです。私はこの至高の神とともに見たのです。存在と虚無とが一つになって「無からの創造」という相を現出させるのを。

「ディオニュソスの歩みが、ヘルメス・トリスメギストスの傍らまで達すると、ディオニュソスはそこで跪く。むろん至高神への敬意の表れである」

トリスメギストス そうだ。それはキュベレーの神殿の地下においてのことだった。お前の虚無がゼウスの中心点となったとき、その相は現れたのだ。

ディオニュソス はい。

トリスメギストス だが惜しむらくは、あの時の「無からの創造」は、しょせんゼウスの内に、お前が取り込まれたという形式に過ぎなかった。つまり、創造のうちに虚無が吸収されたに過ぎないのだ。そこには「二つの最遠離れた原理が一つに糾合される」というダイナミズムが欠けていた。

ディオニュソス そういえば確かに、あの時の私は、手足をもがれた「心臓」としてゼウスに呑み込まれていましたね。

トリスメギストス そうだ。だから私には物足りないのだ。あれは本物のマンダラとは言い難いものだった。マンダラを真実のものとするための、霊的なエネルギー量が、まるで足りていなかった。

ディオニュソス 結局あの時は、私が幼く柔弱すぎ、父が壮健で偉大過ぎたのです。

トリスメギストス だからこそ、今ここで、わしは本物のマンダラを現わしたいとおもっている。まことに「今ここで」な。今のディオニュソスとアポロンならば、その力は、まさしく高水準で拮抗していると言えるじゃろうからの。

アポロン（後じさりしながら）やめてくれ。私には、あなた方が何を言っているのかが解らないのだ。私はただ怖いのだ。呪われた闇の子と交わるのが恐ろしいのだ。

トリスメギストス（アポロンに）この期に及んでも、飽くまでお前は、ディオニュソスに近づくのを避けるのか。

アポロン だって私は何も分からない状態でここに立っているのですよ。私以外の者はみな物知り顔なのに、私だけが状況を飲み込めないでいるのです。

オルフェウス

ならば私がアポロンさまを導きましょう。

私であれば、アポロンさまも、

どうにか信頼してくださいませでしょう。

アポロン（生首に気づいて）お、お前オルフェウスか！ 首だけとは、何という姿になったのだ。

オルフェウス

これは私に課せられた運命です。

主よ、どうか気になさらず。

アポロン いや、さすがに気にはなる……

オルフェウス

いずれにしてもです、いま私の首は、

ディオニュソスさまの腕のうちにあり、

他方、わたしの愛器である豎琴は、

アポロンさまの手のうちにあります。

アポロン 確かにそうだが……

オルフェウス

この各々が意味するのは詩と音楽です。

（詩＝首、音楽＝豎琴）

そして、この二つが和声を奏でるとき、

詩と音楽は一つに融けあって、

豊麗な「歌」となるはずなのです。

トリスメギストス なるほど、詩と音楽が、和声を奏でたものが歌か。うまいことを言う。

オルフェウス

ですから私は、これから、

「大いなる「歌」を謳い上げましょう。

それによってアポロンさまと、

ディオニュソスさまの距離は、

自然と縮まらざるを得なくなります。

トリスメギストス うむ。その試みによって、ディオニュソスとアポロン自体が、一つの歌となるかもしれないぬな。

シレノス わしたちは、それをただ見守っておればいいのか？

オルフェウス

いえ、だみ声のあなたはさておき、

マイナスとピュティアには、

ここに全面的な協力を煽ぎましょう。

他でもなく、私オルフェウスと共に、

歌を歌ってもらおうという形でもって。

そう、今日ここで歌われる歌が、

どこまでもどこまでも大きく広がる、

豊かで突き抜けた交響楽となるように。

トリスメギストス そうだ。それでこそ、私が立てた計画の幕開けにふさわしい。オルフェウスよ、ではまず、大いなるシンフォニーの序奏を奏でよ。ここに集う者たちは、私が中空へと導こう。

「アポロンの陣営、ディオニュソスの陣営、ともに誰もが宙に浮きあがる。中には、それに戸惑う者もいる」

トリスメギストス 大丈夫だ。これから紡がれる歌が世界に届くよう、大空という広い舞台を用意してやろうというだけなのだ。安心せよ、急に落ちたりはせぬ。

シンフォニーの序奏

中空に浮き上がった状態で、各人が歌い始める。

オルフェウス

では私から歌いましょう。

これより始まるのは、偉大なる結合の歌。

あえて遠く離れたもの同士が、

宿命的な親和力によって、

再び一つになろうとする還元の歌。

つまりはこういうことです。

一つのもが二つに分かれ、

二つのもが四つに分かれ、

四つのもが八つに分かれ、と、

世界は分岐しながら細密になりつつ、

分別を保ち、己の色合いを深め、

より個性的なものとなっていった。

ゆえに今やこの世界には、

無数とも言える「個」溢れている。

けれども世界には、

かかる「個」の制約を超越し、

分別智を乗りこえ、

彩りを重ね合わせ、

より豊穡なものとなるべく、

大きなものに結合されたいという、

そうした強い意思がある。

ただ一つのものへ還流したいという、

そうした強い欲求がある。

そして、その欲求を叶えた、

いわば超越的な存在として、

この世界に君臨する者こそが、
他ならぬ、わが主アポロン神なのです。

しかしながら私たちは、
今日ここにおいて、

光の神（アポロン）の限界、

「をも」超えたと言い得る、

一なるものへの還流——

ゆえに、最終的な大結合をも、

まもなく見ることになるのです。

すなわち光と闇という、

真実に極限的な二つの原理の、

その最も包括的な総合をも、

ここに見ることが出来るのです。

そのためのいざないとして、

まずは光（アポロン）の陣営から、

その奥義について語ってもらおう。

ピュティアたち

私たちは光です。ただただ明るい光です。

そこには一片一塵の陰りも、

真実に、決して含まれてはおりません。

なぜというに、私たちの光に包まれると、

かの卑劣なる闇の欠片たちは、

私たちが保持している永遠の時間の中で、

光に吸収されるしかなくなるからです。

しかも私たち遍照する光の時間は、

今すでに永遠そのものであるので、

闇のほうもまた、今すぐに、

その中で消化されてしまうのです。

マイナスたち

なるほどお前たちは、その身のうちに、

一切の闇を持っていないのだね。

つまりお前たちは、この世のすべてを、

自身らで包摂している訳ではないと、
そのように言っているわけだ。

だからこそ我々闇の子は、
お前たちの「外部」に現れることになる。
アポロンの知らない場所で息づき始めた、
我らがディオニュソスさまのように。

セフィーネ

そういう事ではないでしょう。
いえ、そういうことなのでしょうか？
アポロンさま、私たちが保持している光は、
この者たちが言っているような、
僅かでも限定を受けたものなのですか？
すべての闇は、我らが光のうちに溶けて、
そこに吸収されているのではないのですか？

アポロン

永遠という時間の中央にあるのは、
現在という、恐ろしいほど短い刹那である。
そして、その短い刹那のなかでのみ、
我らが光の摂理は絶対のものとなる。

トリスメギストス

されど時間に二つの種類あり。
永遠たる刹那の時間とともに、
滔々と流れる時間もまた、
神と世界の摂理にとつて、
どうしても欠かすことが出来ぬもの。

ディオニュソス

そして、瞬間瞬間に成立する永遠は、
奔流のごとく流れる時間に、
とても追いつくことが出来ない。
その追いつけなかった流れのうちに、
我らが闇の子たちは、
確かに息づいているのです。

トリスメギストス

それはこうも言い換えられるじゃろう。
現世とは、光と闇とで構成される、
いわば「立体」の世界に他ならない。
その立体を構成するために、
どうしても不可欠な「闇」であれば、
いかなアポロンの遍照無辺の光とて、
これを追い出そうとすることは、
決して許される所業ではないのだと。

モルティ

この偉い神さまが言うとおり、
苦しみが無くならない現世において、
私たち闇の子らの住む場所は、
どんな時にも、つねに確保されている。

マイナスたち

もちろん現世にあるのは、
深き闇ばかりではありません。
明るい光に照らされてこそ、形象は、
「目に見えるもの」になるのでしょう。
けれど私たちは闇の使徒であり、
形象を壊す力の依代なのです。
私たちに壊されることによって、
形象は塵となり、骸となり、
ついには輪郭の欠片もない、
純粹な闇そのものとなります。

アポロン

おお、だからこそ私は、
お前たちのことが空恐ろしいのだ。
お前たち闇の子らは、
私が払った「形成」の労苦を、
いっさい惜しむことをせず、
僅かなためらいも見せず、
すべて水泡に帰してしまふ。

呪わしき破壊者たちよ、
すみやかに私から離れ去ってくれ！

ディオニュソス

それは土台無理な話というものです。

だって形あるものが無くてですよ、

どうしたらそれを「破壊」できるのです？

私たち闇の陣営が求めるのは、

大いなる形象が瓦解するさいに発する、

勇壮なる大音響と壮麗なるパノラマ、

そして、心の底からの恍惚なのです。

幼児は積み木を重ねることにより、

創造の喜びを味わうものですが、

それと同時に幼児は、

高く重ねられた積み木を壊す時にも、

むしろ形成のときよりも強いぐらいの、

恍惚たる笑顔を浮かべるものです。

アポロン

それは私に対する呪いか？

やはりお前は、光の化身たる私に、

打ち消しの闇を投じるだけなのか？

ディオニュソス

ああ、まことに悲しいことに、

あなたと結びつこうとすれば、

どうしても、このような事になってしまう。

兄さんの光と、私の闇が近づくと、

このような哀しい諍いとなるのは、

われら縁遠い兄弟にとって、

どうしようもない宿命なのでしょうか。

オルフェウス

存在するものへの破壊作用、

あるいは存在の虚無化――

かかる現象はたしかに、

ある種の二者結合ではありません。しかし、この結合はどう捉えてみても、底知れぬ不幸にしか見えません。

ですが、本当は私は

もっと幸福感のある、

もっと違った形でもって、

二柱の神のあいだのメディアウム、

すなわち「媒介」になりたいのです。

至高の神よ、ならば私はほしい、

どうすれば宜しいのでしょうか。

トリスメギストス

ここに来て、重大な問題が露見したな。

となればオルフェウスよ、率直に言って、

この根深い問題を解消するためには、

これ以上お前という人間に、

媒介役を任せ続けることは出来ないのだ。

オルフェウス

何ということ仰るのです。

私をこの場から引き離そうというのですか。

トリスメギストス

そうだ。残念ながらこう言うほかない、

この場を収めることは、とどのつまり、

「オルフェウス、お前では無理なのだ」と。

つまりお前では、仲介者として、

媒介として、メディアウムとして、

どうしたって役不足であるのだ。

お前が成就できるのは、

二柱の神々を、ただ現状のまま、

互いに近づけることに限られる。

オルフェウス

それではいけないのですか？

だって媒介とは、仲立ちとは、
そういうことではないのですか。

トリスメギストス

いや、それだけでは足りないのだ。
アポロンとディオニュソスを近づけ、
これらを肯定的に結びつけるためには、
オルフェウスよ、お前のように、
ただ素材を引き合わせるだけの、
「常温的」媒介者では力が足りないのだ。
今ここで必要とされているのは、
言うなれば、器の中で素材同士を温め、
その熱によって新しい料理を作るような、
そうした器と熱と技量とを持った、
料理人のごとき「加熱的」媒介者なのだ。

オルフェウス

器と熱と技量を持った媒介者……
そのように言われても、私には、
あなたさまに要望されているのが、
どんなものなのか皆目わかりません。

トリスメギストス

その分からないことが、
そのまま、お前の限界を示しているのだ。
いや、お前が人間であるからには、
それは仕方ないことだと言ってよい。
むしろ「お前はよくやった」と、
心から褒めてやりたいとさえ私は思う。
確かにお前はディオニュソスと、
アポロンをここに引き合わせたのだから。
それだからこそ、いま告別を言おう。
もの言う生首となってから久しく、
すでに死すべき境涯にあるお前だ。
よってオルフェウスよ、今こそお前を、
かの冥界へつづく道程へと、

立ち戻らせてやることにしよう。

これまでご苦労だった。最愛なる妻と、
これからは平穏に暮らしてゆくがいい。

オルフェウス

ああ、意識が遠のいていく。

現実世界の代わりに、

あの見覚えある景色が、

そう、カロンの渡し船の風景が、

まぶたにぼんやり見えてくる。

さようならアポロンさま、

そしてディオニュソスさま、

首（詩）と豎琴（音楽）によって、

ご両名を引き合わせられたことを、

私は心から誇らしく思っています。

〔豎琴の音が消え、オルフェウスの首は、パルナッソス山火口の深みへと吸い込まれてゆく〕

第9章 大神アテナ

登場人物

アポロン 存在の神、太陽神。そしてディオニュソスの兄でもある神。

ディオニュソス 虚無の神、ブドウ酒の神。アポロンにとっては弟にあたる。

シレノス デイオニュソスの従者。

ヘルメス・トリスメギストス 神々の歴史を操作する至高の神。トリスメギストスと表記。

アテナ ゼウスの頭から生まれたという女神。ディオニュソスの姉であり、かつて、乳幼児期のディオニュソスを養育していたことがある。

☆メティス 思慮の女神。ゼウスによってアテナを孕むも、その出産を恐れたゼウスに呑み込まれることになる。アテナは後発的に、ゼウスの頭から誕生した。

※ ☆は本文には登場しない人物や神。

新しい媒介の登場

中空で繰り広げられる交響楽が続く。オルフェウスという媒介者がいなくなることで、アポロンとディオニュソスとのあいだの緊張が、さらに高まってくる。どちらも感情が昂っている。

アポロン

オルフェウスが消えてしまった。

私をここへ呼び寄せておいて、

何の解決も与えないままに、

当のオルフェウスが消えてしまった。

ディオニュソス

おお、本当にオルフェウスよ、

お前はなぜ、突然消えてしまったのだ？

駄目だ、お前がいなくなるとは駄目なのだ。

このままでは、どのように転んでも、

折角お前が引き合わせてくれた兄を、

私の闇が喰らい尽くしてしまいそうだ。

頼むから、戻ってきて教えてくれ、

私はどうしたらいいのだ？

トリスメギストス

そのように不安がらなくてよい。

苦しんでいるお前たちのために、

私が新しいメディアウムを用意しよう。

すなわちそれは、

真に意味のある「結合」を実現できる、

器と熱と技量をもった媒介者の登場だ。

〔ヘルメス・トリスメギストスが大きく手を広げる〕

トリスメギストス

アポロンとディオニュソスが登壇すべき、

高次の舞台そのものとなる者よ、

輝く触媒よ、神聖なる霊性の器よ、

わが神力によって、今こそ、ここに現れよ！

〔中空の一角から、突然アテナが現れる〕

アテナ（怯えつつ）

誰が私を呼んだのでしょうか、

無理やり引っ張られるようにして、

私はオリュンポスからここに転じました。

あら、そこにいるのはアポロン？

では、こちらの異形の神は誰でしょうか。

トリスメギストス

来たなアテナよ。そうアテナよ、
お前こそは二柱の神、すなわち、
アポロンとディオニュソスの媒介として、
誰よりも相応しい存在である。
ではまず、ことの手始めとして、
かつてゼウスによって奪われた記憶を、
ここに、わしが蘇らせてやるとしよう。

アテナ（少し目まいを覚えたような表情をしてから）
おおシレノス、ザグレウスではないか。
姿が変わってしまっても分かるぞ。
お前たちは、かつて私と生活を共にした、
愛惜おく能わざる、懐かしき家族ではないか。

シレノス　なんと、アテナさまがわしの名を！

ディオニュソス
ああ姉さん、私のことが分かるのですね。
懐かしい。ああ、本当に懐かしい。
こうして会えたことを嬉しく思います。
けれど、一体どういう理由で、
姉さんがここに呼ばれたのでしょうか。

トリスメギストス
それについては、わしから話そう。
随分と昔のことになったが、わしは、
ゼウスに、ある予言を与えたことがある。
それは奴が思慮の女神メティスを孕ませて、
その子供が生まれるのを待っている、
ある春のうらかな日のことじゃった。

ディオニュソス
ああ、それは確か聞いたことがある。
そうだ、あのとき私が、
虚無神として成ったときのことだ。

トリスメギストス

わしは言った、「ゼウスよ」と。

「メティスが産んだ子が男児であった場合、その子は父親を制して、新しい神の王、すなわち四代目の大神となり、

衰え萎んだお前の代わりに、

神々を統べることになるだろう」と。

つまり、アテナが男であったならば、

ウラノス、クロノス、ゼウスに続く、

四代目の創造神となるだろう、とな。

アテナ

その予言は私も知っています。

けれども私は見てのとおり、

こうして女神として生まれてきました。

ゆえに予言は無効になったのです。

トリスメギストス

たしかにそうじゃ。だが、実はそれは、

お前が本来生まれるはずだった性を、

わしがゼウスのため、無理に捻じ曲げて、

現世に生まれさせてやった結果なのじゃ。

シレノス なんと！

トリスメギストス

しかしながら今は、わしはこの場に、

「男性神としてのアテナ」を欲している。

男性神、創造神としてのアテナを、

いや、創造神という称号を持った、

巨大な「器」を欲しておるのだ。

なぜなら、創造という原理だけが、

存在と虚無という両極端の原理を、

少しも相殺することなく、

円満に包摂することが出来るからだ。

つまり創造神アテナだけが、

アポロンとディオニュソスの媒介、
すなわち真のメデイウムとなれるのだ。

アテナ あなたは、私にどうしろと言うのです？

トリスメギストス

ならば今こそ儀式を始めよう。

アテナよ、わが至高の神力によりて、

その姿を「男」のものへと変じめよ。

かの時のゼウスに与えた予言のままに、

四代目の創造神となるはずだった、

「息子」としての姿を現わすがいい。

男性神アテナの御業

ヘルメス・トリスメギストスの神力を受け取ったアテナが巨大化し、同時に男神の姿をとる。

アテナ

おお、この輝く体の隅々に、

見知らぬ力が、熱く熱く湧き上がる。

これが男神としての、創造神としての、

あらゆる神々を統べる王としての、

「ゼウスの息子」としての力量なのか！

トリスメギストス

たしかに凄まじい力が漲っておる。

だがアテナよ、今のお前の内部には、

ただ茫漠たるエネルギーだけがあって、

そこには内容と呼び得るものが何もない。

つまり今のお前は、熱と空間だけをもった、

単なる「器」であり「舞台」であるのだ。

アテナ

たしかにそうかもしれぬ。

いまの私は、自分の内側に、

何の形象も認めることが出来ない。

トリスメギストス

よってお前は、その空間、舞台に、

アポロンとディオニュソスを乗せてやり、

彼らとの交わりによって、創造という、

大神にとって不可欠な「内容」を、

その伽藍のような体に満たすがよい。

アテナ

よし。では、まずアポロンよ、

お前は、その男神の姿でなく、

より「存在の神」としての本質に近い、

人間神としての姿に変わるがよい。

〔アポロンの姿が、一瞬アルテミスに変わったかと思うと、すぐにアポロンとアルテミスが混ざったような、雌雄同体の体に変化する〕

アポロン（中性的な声で、アテナへ）

あなたは知っていたのですね、

私の背後にアルテミスがいることを。

本来的には、私が男女合一の、

アンドロギュノスの神であることを。

そう、私は「人間」が神性を持つことを、

男たちや女たちに教える神なのです。

アテナ

ああ、分かっておる。

ではアポロンよ、私の右手に乗りなさい。

アポロン（アテナの言葉に従いながら）

「おお、ここは温かい。私にとって、

安らぎの場となりうるどころです。

アテナ

初めに、お前に聞きたいことがある。
アポロンよ、存在の原理を司る神よ、
お前は「なぜ」存在しているのか。
あるいは「どうして」「いかにして」
お前は存在することが出来るのだろうか？
つまり、今お前が存在できている根拠とは、
いったい何なのだろうか。

アポロン

そんなことを尋ねられるのは、
この世に生まれて初めてのことです。
ですが答えは一つしかありません。
私の存在に、根拠などはないのです。
私という存在は、ただ「在る」のです。
その事実の背後には何もありません。
私はまさに、唐突として現れた、
無限、永遠の「存在」であるのです。
ですが、たとえそこに根拠などなくとも、
その、ただ在るだけの「存在自体」に、
至純の価値が具わっているのです。

アテナ

なるほど、そこにお前の限界があるわけだ。
実際には、その存在に根拠、
もしくは背景がない訳ではないのに、
お前の心のほうが、自分の背景、
あるいは自分の背後に、
完全に目を閉ざしてしまっている。
しかしお前は、他ならぬこの私によって、
その限界を突破することになるだろう。
アポロンよ、今こそお前の「背後」に、
その目を向けてみるがいい。アポロンよ、
今こそ自分の後ろを振り向いてみよ。

アポロン（混乱して）

出来ませぬ。いや、違うのです。
これまでだって私は「自分の後ろ」を、
見ようとしなかった訳ではないのです。
確かに見ようとはしたのですけれども、
見ることが「出来なかった」のです。

アテナ

ああ、それについては私も分かる。
男神としてのアポロンであれば、
背後を振り向こうとすれば、
そこには女神アルテミスとしてのの、
自分自身がいただろうからな。
またアルテミスが振り向こうとすれば、
その背後にはアポロンがおったはず。
かくして、お前から「背後」という、
当然あって然るべき概念は、
見事なまでに奪い尽くされていた。
お前を「存在の神」の座標に、
いついつまでも縛り付けるために、
三代目の大神ゼウスの意図によって。

シレノス ゼウスの意志によって……

アテナ（アポロンに）

しかし、今のお前の姿でならばどうか？
見てのとおり、この私は、
完全にアポロンとアルテミスを結合し、
お前に人間と同様の姿を与えてやった。
そして、そのような人間の姿であれば、
お前には背中があり、またそれゆえ、
お前には「背後」がある。と確かに、
そのように言えるのではないか？
よって、存在の神アポロンよ、
私の掌上にあって、今こそ後ろを、
未知の世界を、知るべき真実を、
いざ振り返って見てみるがよい。

アポロン

本当は振り向きたくない……のだが、
おお、勝手に体が、後ろを向いてゆく。
……そして、きっと私は、心の奥底では、
本当は、ずっと前から知っていたのだ。
そうだ知っていたのだ。振り向けば、
自分の背後に何を見出すことになるのかを。

〔アポロンが、ついに後ろを振り向く〕

アポロン（目を見開いて）

そう、お前なのだディオニュソス。
私の背後には、忌まわしいお前がいるのだ。

〔ディオニュソスは、すでにアテナの左掌に乗っている〕

ディオニュソス

よく見てください、兄さん、ここに、
あなたに嫌われ続けた弟がいます。
けれども知ってください兄よ、私の方は、
そちらのまことに視野狭窄的で、
ひたすらに一方的な気持ちとは異なり、
決して兄さんを嫌ってなどいいいのです。
むしろ「いつか兄さんと一つになりたい」
と、ずっとそう思っておりました。
それが私の、本当に生まれながらの……
存在理由のごとき、核心的な夢でした。

アテナ

存在の神アポロンよ、改めて見よ、
そこに虚無がある。
お前が心から恐れていた「虚無」がある。

アポロン

そうです、そこに虚無があります。
私を削り、壊し、破滅させるところの、

ディオニュソスという名の虚無があります。

アテナ

しかし、私という舞台の上にあっては、存在と虚無が組み合わさって生まれるのは、決して「破壊」の相ではないことを知れ。

そうではなく、逆にここでは、

世界で最も豊かで生産的な相が生じるのだ。

とはいえ存在の神アポロンよ、

ここで何が生まれるかについては、

お前自身が、その身と心をもって検証せよ。

それは、私が言葉によって示すより、

お前がその全霊をもって体現してみせてこそ、

真に「マンダラ」と呼べるものとなるのだ。

第10章
暁の子

登場人物

アポロン 存在の神、太陽神。アルテミスと同体である。

アルテミス 存在の神、月神。アポロンと同体である。

ディオニュソス 虚無の神、ブドウ酒の神。

トリスメギストス 神々の歴史を操る至高の神。

ピュティアたち アポロンの巫女たち。

マイナスたち ディオニュソスの巫女たち。

輝く人影 Ⅱ暁の子。悪魔ルシファアの墮罪前の尊称である。まだエル（神、光）の語尾を奪われていなかった頃のルシフェル（ルシフェル）の名は「光をもたらすもの」という意味だった。

また理念としてのルシフェルは今も「地獄のような深い闇の底に、創造の赤い光が眠っている」ということを教える元型だと、私は考えている。

エロスの力

パルナッソス山の上空に浮かぶ神々とその僕たち。アポロンは、アテナの影響下にあって、ディオニュソスという存在に憧れを感じはじめた。

アポロン

おお、この体にエロスの力がみなぎる。

とても中性的な姿を保ってられない。

「アンドロギュノスの姿から、むしろアルテミスの姿に近づいていく。それにつれ、意識と言語もまた、アルテミスのそれに収まっていく」

アルテミス

エロス……エロスの力とは何でしょう。それはおそらく、自分が持っていない、むしろ自分とは正反対と思えるものと、それでも一つになって、それにより、今までは次元の異なった自分へと、高く成長したいという、
貴い欲求ではないでしょうか。
その強い欲求に引きずり込まれ、その力に根源から翻弄されている今、この存在の神アルテミスにとって、
虚無の神ディオニュソスとは、
ああ、何とまあ美しく、かつ好ましく、この目に映じられることでしょうか。

ディオニュソス

それは、あなただけの欲求ではありません。私などは、ずっとそれを感じていました。だって、存在と結びつくことがなければ、虚無の虚無たる私は、ほんとうに、「ただの虚無」にしかたないのですから。ただの虚無とは何でしょう。
それは見捨てられた暗闇であり、ほんとうに何の意味も意義もなさない、ただの「ひとつの点」であるに過ぎません。偉大な存在であるあなた、存在の神であるあなたと結びつくからこそ、このディオニュソスはようやく、意味のある何者かとなるのです。おお、眩しき兄よ、いや、今の姿ならば、麗しき姉とも呼ぶべきでしょうか。どうか、この小さき弟めの手をとり、この体をしっかりと抱きしめてください。

〔巨大なアテナが、左右の手を側寄せ。それによって、当然アルテミスとディオニュソスが接近する〕

アルテミス

わが弟よ、闇の闇よ。

ディオニュソス

姉さん、光の光よ。

〔アテナが左右の手を円く合わせ、さらに完全に合掌させる。そして、たまゆらの沈黙ののち、もう一度円い膨らみをつくる。すると指の間から、赤い光が放たれる〕

アテナ

おお、この光、この赤い輝きこそ、

私を持つべき、創造の「内容」である。

暁の子の誕生

赤い輝きのなかで、二柱の神が交じりあい、一つの何者かになろうとしている。しかし、完全になる前に、各々の神が、最後の声を上げる。

アルテミス

私の無限の光が、虚無と触れ合った。

ディオニュソス

私の虚無から、無限の光が放たれる。

ピュティアたち

何という美しい、新しい光。

私たちを包み込むのではなく、

私たちの胸に突き刺さる、

骨の芯まで浸透するような光。

マイナスたち

ごくごく小さな火花としては、
私たちはすでに、この光を知っている。
かのときに目にする神々しい光だ。

モルティ

そうだ。我らが祭の終わりにあたって、
主ディオニュソスと我らは唱える、

「ディオニュソス・ザグレウス・ゼウス」
と。そして、その瞬間に、

私たちのまぶたの暗がりには、

ほんのささやかな火花として、

閃光のような赤い輝きが映るのだ。

そのときの輝きと、この赤い光は、

その性質としては、きつと同じもの。

マイナスたち

けれども光の強さばかりは全然ちがう。

ここに現れた赤い光の何という、

おお、何という強くて荘厳な輝き！

アテナ

闇の黒と光の白が結ばれるとき、

夜のとばりと昼の照りが結ばれるとき、

そこには暁の赤い光が現れる。

それにしても、何と美しい緋色の輝き。

しかも、その光をまといながら、今ここに、

新しい一柱の神が現れ出ようとしている。

〔アテナが掌を広げると、そこに輝く人影が現れる〕

輝く人影

わが名は「暁の子」なり。

赤い光、茜色に輝く創造の光。

黒より放たれ、赤く輝き、

白く広がる始原の光。

我こそは夜の終わりに立ち、
そこに光をもたらす、
黎明のあらわれなり。

アテナ

暗闇を容れてこれを支配し、
また光も容れてこれを支配する主。
暗闇と光とを同時に手中に収める王、
暁の子、光をもたらす者よ。
そなたこそは、創造神の内容として、
もっとも相応しい神性である。

そう、存在の神アポロンは、
そなたによって創造されたのだ。
そして、そなたという創造の基点、
その名称こそがディオニュソスなのだ。

暁の子よ、そなたこそ凡ゆる存在の、
その存在しうる根拠となるべき、
「存在の創造」の象徴であり、
「無からの創造」であり、まさしく、
私が探し求めていた当の者である。

暁の子（少し弱って）

アテナさま、どうか急いでください。
あなたからの力添えを失えば、
この私は今すぐにも、
アポロンとディオニュソスという、
さきの二柱の神々へと分離してしまう。
だから、どうか少しでも早く私を、
あなたの一部としてくださいませ。
どうか急いでこの私を、
あなたの心臓にして下さいませ。

アテナ

ならば、私の胸に飛び込むがいい。

この体こそは、暁の子の容器であり、
お前という暁の子こそは、
この体の「内容」なのだから。

〔暁の子が、アテナの胸の中に飛び込んでいく〕

アテナ（赤い輝きを放ちながら）

おお、今こそ私は、真の創造神として成る。
すべての存在が、我が心臓に流れ込み、
すべての存在が、我が心臓から放たれる。
今こそ得も言われぬ根源の光が、

暁の緋色の輝きを伴って、

それが白むまで、遠くへと放射されてゆく。
これこそ完璧な光の相ではなからうか。

そして私は、完璧に成った創造神として、
この新しい世界に、ゼウスと代替わりし、
四代目の大神として君臨するのだ。

第11章 オンパロス

登場人物

ゼウス ウラノス、クロノスに続く三代目の大神。創造神。

ヘルメス・トリスメギストス ゼウスを超える至高の神。使者の神ヘルメスの「隠された人格」でもある。

アテナ ギリシア神話では処女神アテナであるが、本書ではゼウスの王座を脅かす、男性神として登場している。

ディオニュソス 虚無神。

アポロン 太陽神、存在の神。

アルテミス 月神、存在の神。

チェリア ピュティアのひとり。

ゼウスの逆襲

アテナが四代目の創造神宣言を行うと同時に、あたりに暗雲が立ち込める。そして、その暗い雲の中から、稲光とともに、怒り心頭に発したゼウスが現れる。

ゼウス

許さぬ、許さぬぞアテナ。

いな、ヘルメス・トリスメギストス。

なんと勝手なことをしてくれたことか！

あなたは、あの私との約束を、

ここにきて反故にするつもりなのか。

トリスメギストス

もう来てしまったのかゼウスよ。
わしが来てよいと言うまでは、
オリュンポスでじっと、我らの様子を、
見守っておれと伝えたはずなのに。

ゼウス

アテナによる四代目の大神の宣言――
ことここに至って、この私が、
じっとなど、してられるものですか！
今ここで繰り広げられているのは、
まさしく私にとっての死活問題です。
いま出て来なければ、明日の私は、
もはや創造神でもなければ、
三代目の大神、ゼウスでもありません。

アテナ（ゼウスに）

そのとおりだ。私の宣言からこちら、
もはやあなたは大神などではないのだ。
かつての父よ、父だった者よ、
刮目して見るがいい。以前には、
たしかに自分のものだった世界が、
いまや新しい統治者によって、
根本から刷新されるそのさまを。
世界は今日このときをもって、
この創造神アテナの所有となった。
男としての私は、四代目の大神として、
真新しい世界を創造する権利と、
その新世界を治める権利を得たのだ。

ゼウス

そのようなことは一切認めはせぬ。
認められるはずがないではないか。
けだし私は、今回のこのようなこと、
つまりアテナとの世代交代劇が、
決して生起しないようにする為にこそ、

たとい世界の秩序が乱れようとも、
ディオニュソスという虚無神を、
この世界に誕生させることを認め、
その具体的な現実化にさえ、
進んで協力したのだから。

アテナ

父よ、あなたが言っていることは、
この私には、いっこう意味が解らない。
私にはつきりと分かるのは、この現状が、
あなたにとり「時すでに遅し」であること。
そして私が、たしかにこの場において、
根源的な覚醒をしたということだけだ。
この新しい創造を押しとどめることは、
もはや、どんな神にだって出来はしない。
ゼウスの世代は破棄されて虚無へと帰り、
他方、わが「無からの創造」によって、
歴史は、新たな創世記を筆し始めるのだ。
そうでありましょう、至高の大神よ、
三倍も偉大なるヘルメス神よ。

トリスメギストス

いや、悪いがそれは違うぞアテナよ。

アテナ（虚を突かれて）

今なんと？ まさか「違う」と仰ったか？

トリスメギストス

ああ。だってそうじゃろう。私がかつて、
たしかにゼウスと約束したのだから。
「虚無神が生まれるのを容認するならば、
四代目の創造神が誕生すること、および、
その四代目と三代目とのあいだに、
古のティタノマキアのような、
厭わしき世代交代劇が演じられることを、
決して現実化させはしない」と。

アテナ

では……では、私は何者なのだ？
ここに男としてのアテナがあつて、
その体の内には、創造神としての内容が、
何の不足もなしに満ち足りている。
つまり、私はすでに完璧であるのだ。
完璧なる創造神なのだ。となれば私は、
今さら、どこにも引き返せはしない。

トリスメギストス

ところがアテナよ、実際問題として、
これより五千年のちの世界には、
お前を、アテナを、四代目の大神として、
認め謳った神話は残っていないのじゃよ。
よって詰まるところお前は、
私がマンダラを描くために執った、
一振りの筆に過ぎない者なのだ。
あるいは、この物語を読む人間たちに、
神々の摂理を伝えるために招いた、
「使い捨てサンプル」に過ぎない者なのだ。

アテナ

だが私は、すでにここにいるのだ。
四代目の大神が、確かに現存しているのだ。
いま現実に、ここに実在するもの、
それをあなたはどうするつもりなのか？
私はそれを尋ねているのだ。

トリスメギストス

もちろん、それほど簡単には、
お前を無かったことには出来なからう。
お前は確かに、正式な手順を踏み、
四代目の創造神として、
ここに堂々と生まれ来たったのだから。
だがアテナよ、お前も知っておろう。
生まれてきたものは、また、

死ぬことも出来るということ。

アテナ

今あなたは何と仰った？

あなたは死ぬと仰ったのか？

不死なる神に向かつて、

お前は死ぬことが出来る、

そのように仰ったのか？

トリスメギストス

アテナよ、紛れもない事実として、

お前のその体躯のうちには、かの虚無神、

ディオニュソスの血が流れている。

そして、ディオニュソス、いや、

ディオニュソス・ザグレウスこそは、

死と転生とを体験した、唯一の神である。

すなわちアテナよ、そなたの体には、

いわば「死の素因」が埋め込まれているのだ。

そして、そのようなお前が相手であるなら、

私は確かに「殺すこと」が出来るだろう。

そう、男としてのアテナ神は、

今ここで、この私によって殺されるのだ。

そうしてお前には、私自身が設えた、

他のものより特段に厳かな、

真新しい墓へと入ってもらうことになる。

アテナ

死ぬ？ 殺される？ 墓に入る？

偉大なる創造神である、この私がか？

私はゼウスと同等の神なのだぞ。

力に満ちた、この世で最上級の神なのだぞ。

いかな至高の神であるあなたであっても、

そう簡単に企図を果たせるはずがない。

トリスメギストス

ところが、その企図を果たすのは、

私ではなく、私「たち」なのじゃよ。よって、やって出来ないことはない。なにせ、この私とゼウスとが、二人がかりでお前を殺すのだから。私たちの連携を向こうに回して、大神とはいえ、はたしてアテナごときが、一体どこまで抗えるものかな？

アテナ

ヘルメス・トリスメギストスよ、あなたが偉大な神であることは、この私も重々分かっている。また父ゼウスが偉大であることも、長年親子をやってきたのだから、これも当然のこととして承知している。だがそれでもだ。私はいまさら、ここでみすみす殺されるつもりはない。

トリスメギストス

いいだろう。その気迫やよし！だが、お前がどのように抵抗しようとも、私はゼウスと交わした約束を守りきる。少なくともアテナよ、私はお前とは、前述したような約束を、取り交わしたことはないのだから。

封印の投網

「アテナ」対「ヘルメス・トリスメギストス＋ゼウス」という図式が続く。ただしアテナは、ヘルメス・トリスメギストスが隠しもしない盤石の自信に、若干気圧されている。

アテナ

くっ……ヘルメス・トリスメギストス、三倍も偉大なヘルメスがどうした！ そんな尊称、しょせんは、身のほど知らずの大言壮語かもしれぬのだ。そうだ、ヘルメスなどという小僧は結局、オリュンポスの末子に過ぎないではないか。かかる小僧ごときが、わが弟ごときが、ほんの三倍ばかり大きくなったところで、この武勇によって名をはせた兄から、戦の勝利を奪うなど出来ようものか。

トリスメギストス（余裕の表情で）

ハハハ、待て待て、お前は「姉」だろう。ゼウスよ、せっかくだから万全を期して、お前に新たな神具を供与することにしよう。見よ、これこそはわし会心の自信作であり、無敵の威力をもつ「封印の投網」じゃ。いまや無二の朋友となったゼウスよ、この網を投じてアテナを封じめよ。これは、いかなる神力によっても千切れぬ、まさに神具の頂点に君臨する逸品である。

ゼウス

では主よ、あなたは本当に、この場で、私とのあの約束を、守ってくださるつもりなのですね。

トリスメギストス

無論そうだ。お前はちゃんと誠実に、ディオニュソスの誕生という、私が課した約束を守ったのだからな。

〔ゼウスが一度頷き、続いて網を投げる構えをする〕

ゼウス

ならば封印の投網とやらよ、
いぎ、どこまでも大きく広がって、
この「世界の種子」を四方から封じ込めよ。
そうして微かな逃げ場もなく封じて、
永久にこれを暗所に閉じ込めるのだ。
世界の種子であるアテナがもはや、
どこにも芽を吹き出さないようにな。
(投網をアテナに投げる)

アテナ

こんな荒い目の網などで、
わが創造の光を遮れるものか！
かえって、私の光の熱によって、
この網を、一瞬で蒸発させてくれようか。
さあ赤き光よ、暁の輝きよ、
すべてを生み出す深紅の靈光よ、
遮るものさえも悉く呑み込んで、
果てしなく広がりながら、
新たな世界を創り出すがいい。

〔しかし、封印の投網は蒸発することなく、アテナの光の放射を確実に遮っていく〕

アテナ

なぜだ、どうして創造主の光が、
こんな網を蒸発させることも出来ぬのだ。
いや、ほんの僅かな疵ですら、
この投網に刻むことが出来ぬではないか。
おかしい、おかしいことだ。
だってこの世にあって、
「無からの創造」よりも高次の真理など、
決してあり得ないはずではないか。
ならば、このアテナとゼウス、
ヘルメス・トリスメギストスの神力は、
頭打ちの状態で同格のはずだ。
それが不動の「靈性の力学」のはずだ。

トリスメギストス

たしかに「無からの創造」は、
この世で最高の真理かもしれない。

しかしながら、それは、

お前やゼウスにとって最高なのであって、
私という存在にあっては、

決してそうであるとは限らないのだ。

お前にとっては残念なことだろうが、

じつは創造の真理の上には、

多元宇宙の広漠たる真理が聳えている。

それこそ私が拠って立つ真理であり、

お前たちには、まだまだ、

理解が及ばない次元にある真理なのだ。

アテナよ、率直に言ってしまうえば、

「無からの創造」など、私にとっては、

子供の手遊びのようなものなのだ。

アテナ（投網のなかで）

嘘だ。存在そのものと虚無が織りなす、

「無からの創造」以上の真理など、

あり得るはずがないではないか。

トリスメギストス

そう思うところにこそ、

お前の悟りの限界はあるのじゃよ。

そして、神の悟りの高さは、

そのまま神力の強さにも転換される。

今ならお前にも分かるだろう。

わしの「多元宇宙の悟り」が、

お前のそれより高次であることが、

そして、その動かぬ証拠として、

お前の体は、投網の勢いに押されて、

ほら、いまも確実に圧迫されては、

次第に小さくなりつつあるではないか。

アテナ（小さくなりつつ）

くそう、何としても弾き返せない。
さらには網目が体に喰いこんできて、
私という神を細分化しようとしている。

ゼウス

そうだアテナよ、お前は細分化されて、
もはや、もとの三柱の神々へと、
戻ってゆくしかない運命なのだ。

アテナ（投網の網目から抜け出して）

ああ、もう男としての自分を保てない。
もう私は……ああ、この体は、
女神アテナに戻ってしまっている。

ディオニュソス（投網から抜け出して）

駄目だ、息子としてのアテナでなければ、
私と兄さんを結合させる媒介としての、
その力量と熱量が全然足りないんだ。

アポロン（投網から抜け出して）

そのせいなのか。私のなかに再び、
弟の虚無に対する嫌悪感が甦ってくる。
じっさい、とてもではないが、
こんな神と一体であることは継続できぬ。

アルテミス（アポロンの背中から）

私もアポロンの背中から、
再び浮かび上がってきました。
もう先ほどまでのようなアポロンとの、
強烈な一体感はありません。

ゼウス（大仰に両腕を上げて）

もうどこかに飛んでいけ、娘アテナよ、
アポロン、アルテミス、ディオニュソスよ。
今日の記憶は、全て綺麗に忘れさせてやる。
だからもう、お前たち本来の居場所へと、

いまを限りに帰っていくがいい。

「投網から三つの光が飛び出し、アテナはオリュンポス山に、アポロンとアルテミスはデルフィの神殿に、ディオニュソスは、従者を伴ってナクソス島に飛んでいく。投網は極めて小さくなり、ただ網目が絡まっただけの塊となる」

世界の墓

投網だった塊が地上に落ちていくと一緒に、ゼウスとヘルメス・トリスメギストス、そしてピュティアたちも地上に戻っていく。パルナッソス山の麓のあたりである。

ゼウス（地上に落ち転がった投網の塊を見ながら）今となっては夢を見ていたようだわい。その夢の欠片として残ったのは、縮まった投網の中でほんのりと輝く、この小さく赤い残り火だけか。これはきつと「無からの創造」の残り火なのだろうな。これもやがては消えていくのだろうが。

トリスメギストス　ゼウスよ、その微かな光だけは保存しておこうか。それこそは世界の墓なのじゃからな。

ゼウス　世界の墓ですか。

トリスメギストス　そうじゃ。アテナによって創造されかかった世界の墓じゃ。だから、今日という日に、世界創造のマンダラが描かれたことの記念碑として、あるいは墓標として、その赤い光だけは保たせておこう。

ゼウス　まあ、私としては複雑な気持ちですが。

トリスメギストス　やがて光も投網も、墓石として冷え固まることだろう。（後ろを振り向いて）そしてピュティアたちよ。

チェリア（目を押さえながら）なんででしょう、強い光に目が眩んでしまって、これまで何が行われていたのか、ちょっとまだ理解が及ばないのですが。

トリスメギストス ピュティアたちよ、この墓を、お前たちの管理のもとで保管してはくれないだろうか。遠い未来、この光を蘇らせる者が現れるまで。

チェリア この僅かに赤く光る塊をですか？

トリスメギストス そうだ。今では見る影もないが、この微かに光る、赤いともし火こそは、ほんの少し前まで「新しい世界」の中核だったものなのだ。

チェリア ええ、私たちにもこれが、大変な出来事の中心にあつたものであることは分かります。

トリスメギストス そう。このアポロンの聖地デルフィに、虚無の神ディオニュソスが訪れ、この二柱の神が合一することによって燃え盛った暁の光……今では残り火でしかないものだが、神々にとって、また人間にとって、決して忘れてはならない光の記念碑なのだ。

「ヘルメス・トリスメギストスが語るうちにも、赤い光がいつそう鈍くなる」

チェリア 分かりました。この赤い光……いえ、もうただの赤い色ですね。赤い石ですね。網目に覆われた、ただの赤い石になっています。この石は、責任をもって私たちが守りましょう。

トリスメギストス 幾久しい遠い未来までも、じゃぞ。

チェリア ええ。いつまでも、いつまでも「今日という日に特別なことが起こった」という事だけでも、後世の人たちにちゃんと伝わるように。

トリスメギストス ではお前たちは、この墓石を中心に据えて、ここに新しい神殿を造るがいい。この墓石に残存する霊力が、お前たちピュティアに、きつと持続的な恩恵を与えるじゃろう。

チェリア かしこまりました。仰せのままに。

ゼウス（ヘルメス・トリスメギストスに）それでは行きましょう。すべては済みました。そして、ひどく疲れました。

トリスメギストス ハハハ、疲れたかゼウスよ。まあそうじゃろうな。もう少しで隠居させられるところだったのじゃからな。

ゼウス こんな思いをするのは、もうこりこりです。では私はオリュンポスに帰って、娘に戻ったアテ

ナの顔でも眺めてやりましょう。

トリスメギストス 私も、この体をヘルメスに明け渡すでしょう。

ゼウス では。

トリスメギストス ああ。

ディオニュソス「世界の墓」おわり

エ
ピ
ロ
ー
グ

吉村作治監修 『古代エーゲ・ギリシアの謎』より

オンパロス（へそ石）。アポロン神殿の地下から発見された。デルポイを大地の中心と定めたゼウスが、印として石を置いたといひ伝えられている。デルポイ博物館。

楠見千鶴子 『酒の神ディオニュソス』より

そもそもデルフィは、予言を司るアポロンの本拠地だ。遺跡の中心であるアポロン神殿は、六本のドーリス式列柱とがっしりした礎石の基壇が見られるが、その神殿内にあった神託予言室の中に、実は信じがたいことだが、ディオニュソスの墓がしつらえられてあったと言われている。

デルフィは、古代世界の中心地とされ、ギリシアだけでなく諸外国からも、重要な国事を行うに当たり、神託を求めてくる人が引きもきらなかつた。

世界の中心を表す「オンパロス」（臍の意味）と名づけられた、ひと抱えもある石が神託室に置かれていたが、この石こそかつてはディオニュソスの墓石であったのだという。

この石を、私は遺跡に近いデルフィの博物館を見た。赤みを帯びた、釣鐘を伏せたような格好をしており、一面にロープ状の彫刻が施されている。世界の臍といったイメージはもてるが、墓というには奇妙な色であり形である。

戯曲ディオニュソス 世界の墓 III

著 者 正道

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
